

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約400点におよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996年度からは、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するプロジェクトに重点的に予算を配分し、重点プロジェクトと位置づけて運営することになりました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。1997年度には、さらに「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、また2000年度からは「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」が組織されました。

さらに2000年度からは、研究所の共同利用性を高めるために、専門知識を有する所外の研究者に代表をお願いして運営するプロジェクトを開始しました。これまでに、「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」などが実施され、2005年度は「音韻の通言語的研究」が所外の研究者を代表として実施されます。

本年度おこなわれるプロジェクトは次のとおりです。



◆南インド・カルナータカの民謡歌手

(インド・カルナータカ州チッカイルール村にて、2003年12月、太田信宏撮影)

重点共同研究プロジェクト

言語の構造的多様性と言語理論

(主査：中山俊秀／所員 7、共同研究員 14)

人間言語は実に多様な構造的特徴を見せるが、一方で、すべての言語は同じ生物学的・認知的基盤の上に形成されたシステムである。人間言語の本質を捉えるためには、その構造的多様性とその根底にある普遍性の両面をふまえる必要があることは異論のないところである。しかし、前者と後者のどちらに力点を置くかについては言語研究者の中で大きく意見が分かれる。

現在の言語研究で有力な形式理論的研究では言語を人類共通の認知能力の問題として捉え、言語知識の普遍的モデリングを目的とする。その枠組みの中では言語の構造的多様性は表層の派生的現象にすぎず、言語システムの本質的理解には副次的な意味しか持ち得ないとする。しかし、人間言語がすべて同じ生物学的・認知的基盤の上に成り立っているという発達上の単一性は、そのまま人間言語能力の発現形としての個別言語の構造的画一性を保証するものではない。言語の構造的多様性の幅が普遍的なモデルでのとりまとめを許すか否かは、未だ経験的な立証を待つ問題である。

言語の一次データに基づいて個々の言語のシステム性を捉えようとする記述的研究では、西欧言語学の伝統の中で「言語分析の基礎」として確立された枠組みやカテゴリーが有効に適用できないケースが多く報告されてきた。その中で、特に、非印欧語型の言語の記述に携わる言語学者、また、多様な構造をもった数多くの言語での事実を踏まえた通言語的、類型論的なアプローチをとる言語学者の間で、異なった言語タイプ間の構造的差異の深さが強く認識され、従来の欧米大言語ベースの普遍的言語理論の展開を反省し、その根本的枠組みを問い直す必要があるという機運が高まってきている。

そこで本プロジェクトでは、言語の構造の様々な面での多様性にかんして言語研究者コミュニティ内での認識を高め、その中で、構造的多様性を人間言語の基本的性質の一部としてふまえた言語記述・理論研究のあり方及び一般言語研究の目指すべき方向を明らかにすることを目的として共同研究活動を展開していく。

阿部 優子	江畑 冬生	蝦名 大助	加藤 昌彦	加藤 重広	佐久間淳一
笹原 健	笹間 史子	沈 力	月田 尚美	藤原加奈江	町田 健
粕山 洋介	吉田 一彦				



◆ナミビア東北端の町カティマ・ムリロの市場で
川向こうのザンビアとの間での人々の往来も盛んである。(2002年9月、永原陽子撮影)

一般共同研究プロジェクト

東アジアの社会変容と国際環境

(主査：中見立夫／所員 3、共同研究員 32)

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の図書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。本年度は、モンゴル史料、および日本所在朝鮮王朝時代古文書に関するシンポジウムをおこなう予定。

赤嶺 守	石井 明	石川 禎浩	井上 治	井村 哲郎	江夏 由樹
岡 洋樹	尾形 洋一	岡本 隆司	笠原十九司	加藤 直人	川島 真
貴志 俊彦	岸本 美緒	楠木 賢道	佐々木 揚	新免 康	菅原 純
寺山 恭輔	西村 成雄	萩原 守	浜下 武志	原 暉之	平野 聡
ブレンサイン	細谷 良夫	松川 節	松重 充浩	毛里 和子	森川 哲雄
柳澤 明	吉澤誠一郎				

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究

(主査：クリスチャン・ダニエルス／所員 4、共同研究員 18)

現在の西南中国は、もともと非漢族の居住地域であり、中国歴代王朝の支配下に少しずつ組み込まれていく歴史をもつ地域である。元明清を通じて、漢民族移民の増大と歴代王朝の統治政策によって、多くの非漢族が中央政府に直接支配されるようになり、そのことによって民族移動が激しくなり、非漢族の土着社会に大きな変容がおり、東南アジア大陸部へ移住する非漢族も出現した。だが、従来この歴史過程を総合的に分析する研究は僅少であった。

本プロジェクトの目的は、(1) 西南中国非漢族の歴史に関する研究発表、(2) 史(資)料の発掘・収集・整理をおこなうことによって、従来注目されることのなかったこの地域の歴史に対する研究を促進することにある。なお、方法論として非漢族を主体とした分析視点を重視すると同時に、歴史学者以外に文化人類学、民族学、民俗学、言語学などの専門家の参加によって学際的なアプローチの構築をめざす。

井上 徹	上田 信	上西 泰之	菊池 秀明	岸本 美緒	小柳 美樹
末成 道男	武内 房司	多田 狷介	谷口 房男	張 士 陽	塚田 誠之
寺田 浩明	林 謙一郎	吉澤誠一郎	吉野 晃	渡辺 佳成	渡部 武

インド洋海域世界の発展的研究

(主査：深澤秀夫／所員 2、共同研究員 17)

本プロジェクトにおいては、個別文化・社会研究の成果を、8世紀頃に成立した＜インド洋海域世界＞の歴史的展開過程についての通時的研究に導き入れること、またその通時的視点を共時的な個別文化・社会研究に再還流することの可能性を検討する。＜インド洋海域世界＞についてのこのような双方的視点による考察は、局所的には地域研究に寄与するのみならず、グローバル化する現代世界の中における多元・多文化的な人の在り方に対し、具体的な共存モデルの提示をも招来するものである。

秋道 智彌	飯田 卓	飯田 優美	川床 睦夫	菊澤 律子	崎山 理
杉本 星子	高桑 史子	田中 耕司	富永智津子	花渕 馨也	堀内 志保
堀内 孝	松浦 章	森山 工	門田 修	家島 彦一	

日本占領期ビルマ（1942-45）に関する総合的歴史研究

(主査：根本敬／所員 2、共同研究員 8)

日本占領期のビルマに関する総合的な歴史研究を追究するプロジェクトとして2001年度に発足し、2002年度よりトヨタ財団の計画助成（1～3年目合計1324万円）を受けながら、国内での研究会と聞き取り調査のほか、日本・ビルマ・英国・米国での資料調査を実施している。主として同時期の政治・思想・行政・軍事・農業（経済）・社会・地方史・少数民族・女性といった諸観点から各人がテーマに沿って調査をおこない、昨年度は最終成果報告を兼ねた国際シンポジウム（英語）を海外からの研究協力者も招いてAA研で開催し、2日間を通じて延べ133名の参加者を得た（2004年10月9日、10日）。最終年度の今年度は、聞き取り調査の継続と、成果刊行物の出版準備をすすめる。年度末（2006年3月）までに英文・和文の論文集をそれぞれ出版し、あわせて聞き取り調査の暫定報告書、および文献解題を含めた関連資料館案内を刊行する予定である。

池田 一人	伊野 憲治	岩城 高広	内山 史子	高橋 昭雄	武島 良成
南田みどり	森川万智子				

修辞学の情報学的再考

(主査：小田淳一／所員 6、共同研究員 18)

古典修辞学の諸部門の中で19世紀まで存続したのは「表現法（elocutio）」のみであるが、20世紀半ばから始まった修辞学の復権は表現法を、テキストを構成する諸要素間の範列的關係及び連辭的關係におけるコード変換の技法として、実体的な要素単位に対して直接作用する操作であると見なすに至っている。

本プロジェクトは言語表現、音楽表現、映像表現等の作り手、またそれらの表現を様々な手法を用いて分析している研究者を共同研究員に加え、芸術の美的価値をある構造の関数として記述するという、一元的な芸術＝形式論に基づく「形式的構造の研究」としての一般修辞学を情報学的に考察することによって、様々な形式を持つ言語文化情報に偏在する修辞学的技法のレパートリーを明らかにすることを目的とする。

青柳 悦子	石井 満	宇佐美隆憲	内海 彰	小方 孝	金井 明人
上村龍太郎	佐藤みどり	往住 彰文	永崎 研宣	永野 光浩	難波 雅紀
西尾 哲夫	平井 覚	堀内 正樹	松本みどり	水野 信男	良峯 徳和

本プロジェクトは、アフリカ大陸を、サハラ以北・以南、東アフリカ・西アフリカ等のように分断することなくとらえ、種々の語族、国家、民族とかかわるアフリカの諸言語を、広い視野から分析・考察していくことを目的としている。

現地調査に基づく、地道ながらもオリジナルな研究を主流としつつ、文献・資料に基づく緻密な考察をも加え、さまざまな歴史・文化の交錯するアフリカの言語の実情を、多彩な研究者の間で共有し、明らかにしていきたい。

具体的な活動計画：

- 1) 年間3乃至4回の研究会を開き、2～3名による口頭発表およびそれに基づく討論を行なう。
- 2) 研究会では、自由発表のほか、その回のテーマを設定し、共同研究員や研究協力者に、個別の言語のデータを提示してもらい、それらをもとにディスカッションを行なうという形式も考えている。
- 3) 研究会の成果は、発表者による、AA研 Journal 等への投稿を要請する等、紙媒体での公表はもちろんのこと、本プロジェクトのウェブサイトを整備し、すみやかにウェブ上で公開していく。
- 4) 本プロジェクトのウェブサイトでは、研究会で口頭発表されたものでなくとも、アフリカの言語研究に関する論文や書評等を積極的に受理・公開する。
- 5) その他、共同研究員等から寄せられた、アフリカ言語学やそれに関連する学会等の情報を、ウェブサイトにおいて告知していく。
- 6) ウェブサイトと並行して、メーリング・リストによる迅速な情報交換を行なう。
- 7) ときには、在日アフリカ人等を交えた懇親の場を設け、広い意味での異文化交流も図っていきたいと考えている。

安部 麻矢	阿部 優子	神谷 俊郎	小森 淳子	榮谷 温子	佐藤 道雄
塩田 勝彦	砂野 幸稔	竹村 景子	柘植 洋一	中野 暁雄	中村 博一
日野 舜也	Philips, John. Edward		宮本 律子	Ratcliffe, Robert R.	
若狭 基道	梶 茂樹	松下 周二	高村美也子	宮崎久美子	

社会文化動態の比較研究—北部南アジアの動きから

(主査：石井 溥／所員1、共同研究員23)

人類学において比較研究は不可欠であるが、それを方法として確立することは大変に難しい。これは静態の比較についてすでに言われているが、動態の比較はさらに大きな問題である。しかし揺れ動く世界の中にある社会文化を把握しようとする場合、動態の比較は、分析の視点として大いに重要である。

ここでは、北部南アジア〔インド（南部4州以外）、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン〕を主な対象地域とし、その諸側面の変化を捉え、相互の比較を行いつつ分析を深める。北部南アジアは英植民地権力の影響が直接的であった地域と間接的であった地域を含み、宗教的にも多様で、また、近年、経済自由化、「民主化」、あるいは独特の国民形成などの多様な国家レベルの変化を経験している。

本共同研究では、このような地域における社会文化変化の分析とその比較をとおして、人類学研究における比較方法の洗練を目指す。

今井 史子	上杉 妙子	鹿野 勝彦	小牧 幸代	佐藤 斉華	橘 健一
田辺 明生	外川 昌彦	中谷 純江	中谷 哲弥	名和 克郎	幅崎麻紀子
Maharjan, Keshav Lall		三尾 稔	南 真木人	宮本 万里	森本 泉
八木 祐子	安野 早己	山上 亜紀	山本 真弓	山本 勇次	渡辺 和之

無文字社会における「むかし」を知るには？—無文字社会の過去を知るための研究とその手法開発—

(主査：加賀谷良平／所員3、共同研究員25)

アフリカやオセアニア等の無文字社会には自らの手による文字ではなく、外部の人間の手による極めて限られた文字資料しかない。このような資料は外部社会のバイアスが高く、また限られた視点からのものであり、無文字社会の人々が自ら自他を考察したものではない。本プロジェクトは無文字社会の人々が自らをどのように考察し、自らの社会、文化をどのように伝達してきたかを研究することによって、これらの社会を自らの視点から再構成することを目的とするプロジェクトである。その第一歩として、様々な研究分野でのむかしを知るための研究を通して、その方法論を研究、議論する。また、各研究分野の連携による「むかし」を知るための研究を模索する。

飯田 卓	池谷 和信	井関 和代	上田富士子	遠藤 保子	神谷 俊郎
亀井 哲也	菊澤 律子	慶田 勝彦	佐々木重洋	佐藤 俊	高村美也子
竹沢尚一郎	鳥山 寛	中野 暁雄	西田 正規	日野 舜也	藤井 麻湖
堀 信行	三木 亘	森口 恒一	吉田 憲司	吉田 忍	米田 信子
和田 正平					

イスラーム写本・文書資料の総合的研究

(主査：羽田亨一／所員4、共同研究員22)

イスラーム世界で著され、記された歴史的文化的遺産である写本・文書資料の総合的研究を目的としている。アラビア語、ペルシア語、オスマン・チャガタイ両トルコ語の写本・文書が主な対象となる。

写本、文書の利用は今日の学界ではあたりまえのこととなっているが、写本・文書資料利用のための方法論については十分な議論が尽くされないまま、進んでいるのが現状である。そこで、現在、日本の各地で行われている写本研究・文書研究をネットワーク化し、写本学、古文書学を踏まえた研究会を積み重ね、相互の知見を交換する。

また、少人数からなる作業グループを編成し、写本・文書資料の校訂、翻訳を推進する。成果は可能な限り、研究所の出版物として刊行する。

赤坂 恒明	秋葉 純	磯貝 健一	江川ひかり	大河原知樹	大稔 哲也
小野 浩	川本 正知	久保 一之	後藤 敦子	清水 和裕	高松 洋一
中町 信孝	林 佳世子	前田 弘毅	真下 裕之	間野 英二	守川 知子
森本 一夫	家島 彦一	矢島 洋一	山口 昭彦		



◆草原の中を進む牛車

悪路では、牛車の方が頼りになることもある。
(ミャンマー、バガン、塩原朝子撮影)

中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究

(主査：三尾裕子／所員 2、共同研究員 19)

本研究では、海外中国人（本研究では、地政学的な「中国」の外に移住した中国系の人々を指す用語として用いる）を対象に、海外中国人を同質的、単一的に表象する従来の人文・社会科学の諸研究に共通した分析視点を批判的に再検討し、新たな海外中国人像（華人／チャイニーズ・クレオール等）や「民族」概念を再構築することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

- (1) 従来の諸研究において等閑視されてきた、周縁的存在となり土着化が進んだ中国系住民および多民族文化との混淆としてのチャイニーズ・クレオール等を中心とする多様な海外中国人に注目し、それらの人々が構成する様々な社会文化の実態、そしてそれらの人々のアイデンティティ形成過程を分析する。
- (2) ホスト社会と中国系住民との相互作用、国民国家化の過程、ローカル／グローバルの関係性から生じる、中国系住民が関わる民族カテゴリーとそのエスニック・ポリティックスの実態を把握する。歴史過程の中で中国系住民の土着化、クレオール化、或いは「中国人化（華人化）」という異なるベクトルが、必ずしも時系列的にではなく、時に同時並行的に進んで来たことや、土着化やクレオール化の道を歩んだ海外中国人のある一部分は、特定の政治的、経済的な要因によって中国人の範疇から捨棄されたことを明らかにする。
- (3) 土着化あるいはクレオール化した海外中国人という周縁性の排除によって、本質主義的な「華僑」「華人」像が想像されるプロセスを明らかにする。これまで2年間では、主に中国系住民を調査対象としてきたメンバーが、中国系移民の視点からホスト社会との関係、その中で構築される自画像についての分析をおこなった。来年度は、徐々に軸足をホスト社会の方に移し、ホスト社会から見た中国系住民の社会、中国系住民との接触、交渉過程、あるいは社会文化の融合、断絶などの様相などについての報告を行う予定。なお、本プロジェクトは、昨年度より開始された科研費基盤 A「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究」と連携し、現地調査を踏まえた研究を行っている。

赤嶺	淳	板垣	明美	市川	哲	甲斐	勝二	紀	宝坤	桑山	敬己
貞好	康志	末成	道男	菅谷	成子	芹澤	知広	田村	和彦	田村	克己
中西	裕二	信田	敏宏	舩谷	鋭	宮下	克也	宮原	暁	山本	須美子
王	維										

日本語組版研究

(主査：芝野耕司／所員 1、共同研究員 8)

1980年代にワープロが普及するにつれて、当時のワープロが実現していた基本的な禁則処理を含むいわば原稿用紙レベルでの組版が普及の兆しを見せ、活版印刷時代の高度な日本語組版は危機に瀕していた。

この問題に対応するため、JIS X 4051 日本語文書の行組版方法を1993年に制定し、1995年及び2004年に改正した。また、2000年にはJIS X 4052 日本語文書の組版指定交換形式を制定した。

欧米での組版は、シカゴ大学のChicago Manual of Styleやオックスフォード大学のStyle Manualなど、組版とともに、正書法も含めたスタイルマニュアルが確立しているが、日本語に関しては、このようなものは存在しない。

こうしたことから、組版規則だけでなく、正書法も含めた日本語スタイルマニュアルを検討することが必要である。

居郷	英司	枝本順三郎	小野沢賢三	小林	敏	逆井	克己	田原	恭二
野村	保恵	平松	慎司						

「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究

(主査：永原陽子／所員 1、共同研究員 22)

本プロジェクトは、ヨーロッパ諸国とアフリカを中心とする旧植民地との歴史的関係において、植民地支配および奴隷貿易のもたらした損害に対する補償や謝罪の問題が双方の当事者の間でどのように論じられ扱われてきたかを検討することをつうじ、脱植民地化過程の段階・特質を明らかにすることを目的としている。そのさい、日本＝アジア関係などを念頭においた比較史的観点を重視しながら、戦争責任論の中から生まれた「人道に対する罪」概念を援用し、「植民地責任」概念を提起しようとしている。アフリカにおける植民地支配はその前史としての奴隷貿易の歴史と不可分であるため、「植民地責任」概念は、必然的に、奴隷貿易の歴史にもかかわって敷衍されることになる。最終的には、この概念を用いて近代世界史の構造の中での脱植民地化過程とそれをめぐる歴史認識をアジア・アフリカの側から照射することを目指している。

本プロジェクトは、研究所のすすめる三つの研究内容のうち、「地域生成に関する研究」にかかわるものであるが、「地域」を一つの限定された領域としてではなく、関係性の概念としてとらえようとしている。近年の旧植民地地域からの「補償要求」などの運動は、当該地域の人々の植民地支配の歴史についての認識を示すものであり、それは旧植民地領有国における歴史認識との相互関係の中で形成されている。本プロジェクトは、アフリカ旧植民地を中心に据えつつ、日本＝アジア関係を重要な参照枠とすること、また奴隷貿易をも射程に入れた長期の歴史的視点をもつことで、従来の地域研究でともすれば後景に退きがちだった世界史の構造の問題に意識的にかかわり、また現代世界の中で具体的な解決を求められているテーマについて、歴史学的な立場から認識を深めようとするものである。

そのような意図から、本プロジェクトではアフリカ史研究者、ヨーロッパ帝国史研究者、ラテン・アメリカ史研究者、日本・アジア史研究者を糾合した「地域研究」の新しいスタイルを試みている。また、若手研究者、とくにPD層から大学院生を含む研究者を目指す人々を中心に組織し、プロジェクトをつうじて若手研究者を育成しつつ新しい共同研究の成果を挙げることを目指している。

本プロジェクトは科研費プロジェクトを兼ねており、年3.4回の研究会のほか、共同研究員の現地調査も並行して進めている。最新の現地調査の結果を持ち寄って研究内容を豊かにすることは、本プロジェクトの重要な内容である。最終的には、成果を商業出版で公表することを目指している。

浅田 進史	飯島 みどり	大峰 真理	小山田 紀子	尾立 要子	柴田 暖子
清水 正義	杉山 優子	鈴木 茂	高林 敏之	旦 祐介	中野 聡
浜 忠雄	平野 千果子	船田クラースン	さやか	前川 一郎	溝辺 泰雄
吉國 恒雄	吉澤 文寿	吉田 信	渡辺 和仁	渡辺 司	



バガンの町から2キロほど原野に入っていくと谷間の中に僧院が一つ隠れるように存在している。谷の上まで登ってきて辺りを見渡している僧が一人いた。(ミャンマー・バガン、2005年1月、高島淳撮影)

ドイモイ（刷新）政策がベトナム共産党の公式な政策として提起されてから、すでに18年が経過しようとしている。この間に、ドイモイはベトナムの党・国家の諸政策（政治・経済・軍事・外交・文化等）、社会、国民の価値観のあり方に大きな変化をもたらした。しかし、この間にドイモイを対象とした研究にさほど進展があったとはいえない。とりわけ、ドイモイ研究の展開に際して不可避であると思われる次の2点に関して、議論が深化されないままの状態を続けておくことは許されないであろう。それは、第一に、ドイモイの起源に関わるテーマであり、その中には、①ドイモイの開始に際しての南ベトナムの役割、②レ・ズアン時代末期（1979年～85年）の一連の改革政策（通貨改革、農業における生産物請負制など）とドイモイの関連性をどのように評価するかという問題が含まれる。第二には、一党独裁下における市場経済導入、経済発展優先志向などの点で、ドイモイと共通すると思われる改革政策が他国にも存在する（した）事実に着目して、ドイモイを一国の枠組から脱却して考察する必要性がある。

本プロジェクトは、以上のような問題認識に立って、大きく二つのアプローチに依拠しながら、ドイモイ研究の新境地開拓をめざす。第一には、ドイモイにおけるベトナム固有の要因を探究するために歴史的なアプローチを援用していく。第二には、体制比較を通じて、ドイモイのもつ普遍的な側面を解明することである。具体的なテーマとしては、第一点に関わるものとして、①ドイモイの起源に関わる諸問題（南ベトナムの存在とドイモイ、レ・ズアン時代末期の改革政策の位置付け、北部におけるドイモイに先行する諸現象、ソ連におけるペレストロイカの影響）、②集団主義体制との対比でみたドイモイ、あるいはドイモイに残存する社会主義的性格、第二点に関するものとして、中国の改革・開放政策、ラオスの新思考政策、移行経済諸国（旧ソ連、東欧など）、インドネシアの開発独裁体制との比較検討を進めている。

石井 明 加藤 弘之 白石 昌也 鈴木 基義 竹内 郁雄 古田 元夫

東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」

(主査：黒木英充／所員 4、共同研究員 21)

東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバリゼーションのプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動（Human Mobility）」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状況に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

なお、本研究プロジェクトは、科研費による「新たな東地中海地域像の構築」プロジェクトと連動して進められている。

臼杵 陽	小副川 琢	粕谷 元	北澤 義之	栗田 禎子	佐藤 幸男
佐原 徹哉	澤江 史子	末近 浩太	土佐 弘之	長沢 栄治	中村 妙子
間 寧	堀井 優	前田 弘毅	松井 真子	村田奈々子	森 晋太郎
家島 彦一	屋山久美子	吉村 貴之			

地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究

(主査：中谷英明／所員 10、共同研究員 45)

現代世界は、一方では物心両面における比較的豊かな生活を保証すると同時に、他方では紛争・貧困・地球環境・疫病などきわめて大規模かつ深刻な問題を惹起している。

これらの問題は互いに連関しているから、個別的对症療法は効果が限定的であり、新たな問題を引き起こしかねない。その解決には、先ず地球文明がいかにあるべきかという明確な未来像が根底になければならない。そしてそのためには、相互影響し合いつつ刻々に変化する複雑なこの世界を、自然・世界（共同体）・人間の3層において正確に理解することが必要である。

往時には一人の哲学者が担ったこの現状俯瞰と新しい世界構想の営為は、科学の加速度的進展と諸地域の急激な変化を伴う今日の世界においては、一人の研究者が遂行することが殆ど不可能となっている。それは人文・社会・自然の研究者の共同研究として、はじめて可能であろう。このような人文科学の新領域を「総合人間学」と呼びたい。

本研究は、以上の認識のもとに、「総合人間学」—自然と社会（地域）に関する最先端の知を集約し、それら諸現象の人的価値を諸文明の精神伝統に照合して再検討しつつ、新しい世界観・人間観・倫理観の確立を目指す「共同研究の場」—の創出を模索するものである。

平成 17 年度研究計画

(1) 第 2 回総合人間学シンポジウム「人間を知り、未来社会を構想する」

平成 17 年 10 月。外国からの招聘者 4 名・日本人講演者 1 名

(2) 研究会：2 回（平成 17 年初夏、平成 17 年 10 月・ワークショップ終了後）

なお、フランスの Maison des Sciences de l' Homme、アメリカの Harvard Round Table（Harvard 大学）との共同研究を実施する。

朝倉 尚	池内 了	池田 知久	池本 幸生	市川 裕	石堂 常世
逸身喜一郎	内山 勝利	大津 透	丘山 新	小川 正廣	柿木 隆介
笠井 清登	桂 紹隆	加藤 進昌	河井 徳治	黒田 彰	行場 次朗
小島 毅	後藤 敏文	塩月 亮子	新宮 一成	杉下 守弘	杉本 良男
関根 清三	立木 康介	恒川 恵市	手島 勲矢	長野 泰彦	西川 昌弘
納富 信留	信原 幸弘	林 信夫	林 もも子	原 洋之介	日高 敏隆
廣瀬 通孝	広田 光一	寶珠山 稔	松尾 剛次	丸山 徹	三木 雅博
村上 征勝	守屋 彰夫	矢野 環			



かつては河であったと思われるとても細長い沼の渡し船。一番近い町からでも悪路を車で 2 時間の果ての村への入り口だ。
(ミャンマー・バゴー管区, 2005 年 1 月, 高島淳撮影)

国家としてのインドネシア、マレーシアを包含する広義の「マレー世界」の多様な地方文化に関する人類学的な研究はこれまでも行われてきた。しかし、多くの地方に残る現地語文書に関しては、人類学、歴史学いずれの分野からも着目されていない。これらの文書の中には、各地方の文化の形成や変遷に関する興味深い資料が含まれており、あらたな資料の宝庫である。本計画は、これらの文書を中心に、地方文化の形成過程に関する研究を行うものである。本計画は以下の事業と組み合わせて行う。

- 1) インドネシア文献学に関する研修を行い、専門研究者の育成、再訓練を行う。
- 2) インドネシアとの共同研究事業の一部として実施する。
- 3) 短期共同研究と組み合わせ、参加する若手研究者を公募する。

2005～2006年度は、外国人客員を中心にインドネシア文献学に関するセミナーを定期的に開催するとともに、ジャウィ文書ならびにジャワ文書の研究に焦点を当てる。

青山 亨	新井 和広	奥島 美夏	Omar Farouk Bajunid	川島 緑
久志本裕子	国谷 徹	黒田 景子	小林 寧子 塩谷 もも	菅原 由美
東長 靖	中田 考	西 芳美	西尾 寛治 服部 美奈	見市 健
水上 浩	山口 裕子	山本 博之		

朝鮮語史研究

(主査：伊藤智ゆき／所員 2、共同研究員 9)

朝鮮語は朝鮮半島で話されている言語であり、日本語同様、その起源や系統関係が不明な言語である。また朝鮮語は15世紀半ばにハングルが創製されるまで固有の文字をもっていなかったため、朝鮮語史の研究はより困難なものになっている。

それに加え、従来の朝鮮語の研究はそれぞれの研究者が特定の時代の朝鮮語について研究することが主で、朝鮮語史を研究する者同士が相互に協力することによって朝鮮語史全体の流れを追求するということはなかった。

そもそも朝鮮語史の研究は、日本でも歴史の古い研究分野であり、研究者も大勢いるにも拘わらず、朝鮮語史をテーマにした研究会や学会も存在していない。朝鮮語史研究が発展しつつある今、研究者が各々の研究を通じて交流することは必要不可欠と見られる。

そこで本プロジェクトでは、古代～近代に至る朝鮮語の研究者が集まり、各時代の朝鮮語について、音韻・文法・書誌学等さまざまな側面からの分析を試みる。

具体的には年2回の研究会を企画する(1回に1～2名程度の研究発表を予定)。この研究会は、古代朝鮮語の内的再構、口訣資料や訓点資料の分析、諸文献の刊行経緯や制作方法等に関する書誌学的研究、中期朝鮮語・近代朝鮮語における音韻・文法・語法・方言に関する諸問題の研究、朝鮮漢字音研究等を発表のテーマとする。またこの研究会には、専門の研究者だけでなく、朝鮮語史研究を志す大学院生も多く参加するよう要請し、多角的な討論の場を目指す。

伊藤 英人	門脇 誠一	岸田 文隆	趙 義成	陳 南澤	辻 星児
南 潤珍	福井 玲	藤本 幸夫			

本研究プロジェクトは、人類社会を霊長類から現生人類に至る進化の軸上で比較考察し、人類学における社会理論の新たな展開をめざそうとするものである。それによって人類の「文化」が社会形成にいかに関与しているかを再考する。

社会理論のなかで第一に問題となる「集団」に焦点を当てる。「集団」の概念を霊長類進化史上におくことにより、この概念の自明性を崩し、個体レベルの自他認識を越え「他集団」なる抽象的な他者の生成に到る「集団」の成りたちをふくめ、「集団」の認識(perception)の生成と展開を進化史的な視点から検討する。これにより、他者認知やアイデンティティといった個体間関係、およびテリトリーの生成とその認知、規則の発生と定着の過程といった個体間関係を越えた社会事象に至る問題群に迫る。

社会事象にあって、「集団」は比較的顕在化(目に見えやすい)したものである。したがって「人類社会の進化史的基盤研究」というときに、広く霊長類学的知見を含めて、人類史的規模での比較の橋頭堡が築きやすい。長期的なプロジェクト研究としては、継続的に「所有」、「制度」などを扱ってゆく予定であるが、その第一歩として、今回のプロジェクトを位置づけている。

共同研究員として、霊長類学の分野からは霊長類社会学および霊長類生態学の専門家、人類学の分野からは生態人類学、文化・社会人類学、人類生態学の専門家を加えている。これに社会思想史の専門家に参加してもらうことにより、霊長類から人類への架橋の理論的意義を考察する示唆を得たいと考えている。

また副次的な効果として、近年、社会生物学、行動生態学への理論的特化という傾向を強めつつある霊長類学研究を、人類との関係に再び位置づけることにより、日本における霊長類学および生態人類学の創契機であった人間存在の根源的かつ多元的理解という学的動機を回復しうることが期待される。

伊藤 詞子	今村 仁司	梅崎 昌裕	大村 敬一	北村 光二	衣笠 聡史
黒田 末寿	杉山 祐子	寺嶋 秀明	中川 尚史	早木 仁成	船曳 建夫

形態・統語分析における ambiguity (曖昧性) —通言語的アプローチ—

(主査：呉人徳司／所員 7、共同研究員 25)

言語の記述にあたっては、対象言語にみられる文法現象が例外なく記述された文法規則にあてはまるのが理想的な状況であるといえよう。ところが現実には、定義のはざまにおちこむさまざまな現象がみられる。たとえば、形態・統語論面において二通り(またはそれ以上)の分析が可能であることは珍しくない(例：モンゴル語の特定の構文の使役分析と受動分析、フィリピン諸語の統語構造のフォーカス分析と能格分析)。一方、通言語的にみると、同じ用語で記述されたものでも実質が異なる(つてみえ)るものもある(例：タイ語における「語」とアメリカ原住民語における「語」)。

それぞれの現象は文法記述(文法理論)における定義の多様性に起因するものなのだろうか、もしくは文法現象の歴史的変化を反映しているのか、それともそこにはこれらと性質の異なる言語に関する事実が隠れているのだろうか？

本プロジェクトでは、文法記述において先行研究における定説とは異なる分析がより適切であったり、データが定義にすっきりと当てはまらない具体的な例をとりあげ、具体的なデータを見ながらその示唆する内容について考察する。このために、類型論的にも地理的にも多様な言語を専門とする研究者をメンバーとする。

梅谷 博之	大角 翠	奥田 統己	風間伸次郎	菊澤 律子	北野 浩章
桐生 和幸	栗林 裕	小森 淳子	佐々木 冠	沈 力	鄭 聖汝
角田 太作	當野 能之	中村 渉	野瀬 昌彦	林 徹	匹田 剛
PRASHANT Pardeshi	Mark Campana	箕浦 信勝	山田 久就	米田 信子	
Ratcliffe, Robert R.	渡辺 己				

所外代表による共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究

(主査：梶 茂樹／所員 13、共同研究員 46)

言語学の本来の研究分野は、音韻、形態、統語、意味であるが、そのなかでも音韻論は、長らく他の研究分野をリードしてきた。本研究プロジェクトは、音韻論のなかでも声調 (tone) を中心とする超分節素 (suprasegmentals) の研究をおこなう。

世界に、声調言語は意外と多い。中国語諸方言やチベット・ビルマ系諸語、またベトナム語、タイ語などの東南アジア諸語、バンツ系やクワ系などのニジェール・コンゴ諸語、マサイ語やナンディ語などのナイル系諸語、南部アフリカのコイ・サン諸語、またアフロ・アジア系の中でもチャディック諸語、さらにはニューカレドニア諸語やアメリカ・インディアン諸語など。

また、日本語やインド・ヨーロッパ系のスウェーデン語やセルボ・クロアチア語などのピッチ・アクセント諸語の研究も重要である。

具体的な研究テーマとしては、声調、音調、アクセントなどの用語の整理と同時に、次のようなものが考えられる。

- (1) 声調 (正確にはピッチ) の音声学的特性
- (2) 子音、母音といった分節素との関係
- (3) 個々の言語における声調の体系
- (4) 声調の語彙的、文法的機能
- (5) 声調言語とアクセント言語との違い
- (6) 世界の声調言語のタイポロジー
- (7) 声調の通時的変化と比較研究
- (8) 声調の発生と消滅

鮎澤 孝子	池田 巧	生駒 美喜	市田 泰弘	伊藤 英人	岩田 礼
上田 広美	宇佐美 (前田) 洋		上野 善道	遠藤 光暁	大江 孝男
岡崎 正男	加藤 昌彦	角谷 征昭	上岡 弘二	神谷 俊郎	木部 暢子
久保 智之	窪田 晴夫	郡 史郎	坂本 恭章	品川 大輔	清水 克正
杉藤美代子	鈴木 玲子	田中 伸一	壇辻 正剛	Donna Erickson	
中井幸比古	長尾 美武	中嶋 幹起	中西 裕樹	中野 暁雄	長野 泰彦
新田 哲夫	早田 輝洋	原口 庄輔	平山 久雄	福井 玲	堀 博文
松森 晶子	箕浦 信勝	藪 司郎	湯川 恭敏	吉田 浩美	米田 信子

◆「シュエダゴン＝パゴダのメンテナンス風景」

ビルマ語でピッサヤーと呼ばれるパゴダ基部の表面の金箔をはがし、張り替える前に地の部分を磨いているのだと思われる。色からみて「地金」は銅であろうか。黄金に輝くビルマ仏教徒の誇りも、この期間だけは一休みの風情。

(ミャンマー連邦ヤンゴン、シュエダゴン＝パゴダ、2005 年 1 月 10 日、澤田英夫撮影)

